

産科領域におけるMSWの役割を考える ～介入のしにくさと不全感から～

富士市立中央病院 ○佐藤理絵 江村宏子 遠藤卓馬

要旨

一般的に、患者家族の療養の場を検討し、整えることを求められる他科に比べ、産科領域では母子の生活環境を整える、育児支援という視点での関りが求められる。ソーシャルワーカー（以下MSW）には病棟から気になるケースとしての依頼や、行政から母子連絡票で情報提供されることが多く、本人・家族からの相談希望は少ないため、介入のしにくさを感じる。入院期間も短く、退院後の継続サポートで関係機関に繋ぐ役割が多いが、支援の実感を持ちにくいことで不全感を抱きがちである。MSWが産科病棟から何を求められているのか、どんなスタンスで関わりを持ってほしいのかを考察した。

1. 目的

「この人心配」「ちょっと話を聞いてもらったほうが良いと思う」という漠然とした介入依頼の背景を把握するとともに、専門職とクライアント（以下Ct）のニーズの不一致がある場合の介入について考察する。産科領域においてMSWが関わる目的・役割を整理し、支援に繋げていく。

2. 方法

2020年10月15日～10月30日の間、病棟の助産師・看護師にアンケート調査を実施。その結果を分析、考察した。対象の26名全員から回答を得ることができた。なお倫理的配慮として、依頼文にて研究目的を説明、回答をもって同意を得たこととし、個人が特定されないように配慮した。

3. 結果

① 年齢

20代～60代までの5段階で分類。50代が10名（39%）と、最も多かった。

② 産科病棟での勤務年数

10年以上が31%と1/3、1年未満と3年未満が合わせて46%と約半数を占め、中堅者が少ない傾向であった。

③ “MSWに介入依頼するか否かを問わず気にかかるケース”

社会的ハイリスク（複雑な家族背景、経済的不安、支援者不足など）、精神・体調面の不安がある方や、助産師・看護師が期待する育児の関りができない方など。

④ “MSWや関係機関の介入が望ましいと考えるケース”

母に精神疾患の既往がある、支援者不足、家族関係・家庭環境が複雑、予定外の妊娠、母子連絡票が出ている方など。

⑤ “MSWにどのような役割を求めるか”

情報収集（生活状況、助産師や看護師が聞きにくいこと）・精神的支援・環境調整

⑥ “MSWをどのように紹介しているか”

「ソーシャルワーカー」「社会福祉士」という名称そのもの。社会資源の紹介窓口、相談にのってくれる人。

◎MSWへの役割期待は、予測とほぼズレがなかった。介入依頼は、産科病棟での勤務年数による差異はないが、経験年数が増えるほどMSWに繋ぐ傾向がみられ、専門職の視点が影響していることも浮かび上がった。

4. 考察

専門職や関係機関が支援の必要性を感じていてもCt側は問題意識がない場合、ニーズの不一致が生じ、介入のしにくさが起こる。介入の仕方への工夫が必要になる。ニーズのすり合わせの難しさがあり、すり合わせてもたやすく環境は変わらない。懸念されることへの予防的な対応も含め、継続的な支援＝関係機関に繋いでいく支援が必要になることを認識した。良い母になることを求められてもその通りにできず、自己否定や不安が生じるCtに対して、MSWは思いを受け止め支え、寄り添う。問題解決志向ではなく、心理的サポートの比重が高くなり、完結を実感しにくいのが、実施している支援の意味・役割を意識し努めていきたい。